

## 2021年度プロジェクト研究所業績報告書(中間報告)

プロジェクト名	まちの居場所づくりプロジェクト
研 究 所 名	実践女子大学まちの居場所研究所
設 置 開 始	2019. 4. 1
設 置 終 了	2023. 3. 31

### <研究業績報告書>

#### 今年度の研究計画の概要

新型コロナウイルス感染症発生以来、人が集まって活動することを目的とする「居場所づくり」の実践研究は実質困難な状況にある。2021年度もコロナの影響が続くことが予想され、計画的な取り組みは難しく、各研究員のフィールドの中で、コロナの感染拡大状況に柔軟に対応しながら、地域をつなぐ新しい「居場所づくり」の方法（しかけづくり）を検討していく。具体的には、日野市カワセミハウスを拠点とする地域交流のプログラム、および、都市農村交流を基盤においた居場所づくりの活動を行い、そこから得られる知見を集約する。活動は、コロナの状況に配慮しながら、学生を要としてすすめる。

#### 今年度の研究実績

2021年度に入ってもコロナの影響が予想以上厳しく、先が見通せず、思うような実践活動ができない状況であった。年度前半は緊急事態宣言が続き、学生も大学に来ることはできず、ほとんど活動ができなかった。そうした中でも、下記に記載のように、日野市との連携で強い信頼関係を築いている「日野市カワセミハウス」を拠点として、①～③の居場所創出に関わる実践活動を展開した。しかしながら、年度後半の2022年1月～3月の期間は、再び感染者数の拡大に見舞われ、活動停止を余儀なくされ、発展展開することができなかった。

##### ① 多世代交流のソフトのしかけづくり

少人数で集まって行う多世代交流プログラム（「くらし工房」）の企画実践と、高齢者の集いの会である「黒川かわせみサロン」の運営協力を行い、関係を紡いだ。また、カワセミハウスで例年行われる「オクトーバーフェスト」という地域をつなぐお祭りの開催形態について、「コロナ禍でも集まれる形を模索し、カワセミハウスの地域の居場所としての価値を高める」ことを目的に、学生が実行委員会の中心になってすすめた。結果的に、「2週間分散型プログラム」を実現して、地域の思いをつなぐ場を作りだした。

##### ② 空間的な居場所のしかけづくりへのアプローチ

生活環境学科主体のデザインチーム「Studio MK labo」が全面的に企画・運営に参加し、12/24, 25 にかけて、「まちなか展覧会-はてな解決研究所」という居場所創出の実験イベントをカワセミハウスの屋内外を舞台として行った。身近な日常生活の中にある「不思議」に心を留めるところから、会話を生み、人がつながるきっかけを創り出すことを意図している。コミュニケーション・ツールとして、居場所となるブースを作成し、体験型の展示や提案冊子の配付などを行った。地域からの来場者が多数あり、場所+コト（アイデア・パフォーマンス・ワークショップ等々）としての居場所創出の試みとして、今後につながる成果をあげた。

### ③ 都市農村交流を基盤においた居場所づくり

都市農村交流による居場所づくり、新潟県十日町市松之山布川地区との関係に関しては、カワセミハウスで「布川ファーマーズマーケット」を行い交流する取り組みを行い、農村を都会の人の居場所としていく関係性構築を目指した。7/1 に夏野菜、10/16 に秋野菜・新米、12/11 に冬野菜の実施を行い、広域で支え合う地域社会づくりの基盤づくりを行った。学生が企画運営の担い手になり、現地との連絡をとって農産物の入荷を行い、販売だけでなく農村の暮らしや生産者の思いの紹介を行い、日野市民と布川をつなぐプログラムを行った。日野市民の中には、布川へ繰り返し通う「通いの関係」を持つ人も生まれるなどの成果をあげた。

## 現在までの進捗状況

### 1. 事業計画の進捗度について（①～④のいずれかを選択してください）

①順調である ②おおむね順調である ③やや遅れている ④遅れている

※上記の進捗度を示す事由を記載のこと。「やや遅れている」「遅れている」とした場合は、改善点を記載。（計画の見直しが必要な場合はその内容も記載すること）

コロナ禍に見舞われながら、主に「日野市カワセミハウス」を拠点にできることを模索し、当初目的としていた「居場所づくりのモデル化」と「地域のハブとなる居場所づくり」を進めている。しかし、設置2年目（2020年度）はほぼ活動できなかったため、設置3年目（2021年度）は、居場所創出の「しかけ」を行うのに精一杯であり（計画してもコロナの状況により実施できるかどうかの見込みが不安定で、計画的な活動遂行は非常に困難であった）、居場所の活動による場の変容、人々の意識変化、学生の教育効果などについては、簡単なアンケートや聞き取りなどの予備的調査レベルにとどまっている。2022年度に設置期間延長を行い、実践活動を積み重ねる中で、居場所創出手法のモデル化、居場所づくりの意義、大学生の地域理解教育の可能性等について検討し、大学が介在する居場所づくりに関する総合的知見をまとめていく。

### 2. 目標達成状況について（①～④のいずれかを選択してください）

① 達成した ②おおむね達成した ③十分達成されたとはいえない ④未達成である

※上記の目標達成状況を示す事由を記載のこと。「十分達成されたとはいえない」「未達成である」とした場合は、改善点を記載。（計画の見直しが必要な場合はその内容も記載すること）

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け続けており、本プロジェクトの遂行は極めて難

しい状況であるが、下記（１）（２）により、目標達成に向けていく。

### （１）まちの居場所づくりのモデル化

2021年度に行うことができた居場所づくりの実践活動を、以下の１．～３．において発展させて、居場所創出モデルを構築する。

## 1. 地域活動への学生参画による居場所創出のモデル化（カワセミハウス拠点）

### 1) 多世代交流プログラムの展開

・家庭科教育の内容を「地域」の中で行う多世代交流プログラムを学生主体で企画し、様々な地域資源を有機的につなぐ「くらし工房」の方法論を構築する。プログラムに携わることによる意識変化などを調査し、居場所づくりの意義を捉える。

・カワセミハウスでは、「日野市子ども家庭センター」主催の子育て支援活動（1回）が予定されており、その活動に、幼児保育専攻の学生らを保育補助ボランティアとして参加させたいと考えている。将来的に、日野市と本学との連携が期待される「日野市子ども包括支援センター」での活動の基盤構築のため、学生・子育て世代・現役保育者らが気軽に集える場づくりを目指して、大学や日野市内の施設における子育て支援活動の実践事例を収集していく。

### 2) 空間デザインの視点からの居場所づくりの展開

2021年度に、カワセミハウスにおいて生活環境学科主体のデザインチーム Studio MK labo が「はてな解決研究所」というコンセプトによる居場所創出のしかけづくりを行った。これを発展させて、地域の新しい発見や人のつながりが動的に生まれる空間的なしかけづくりを検討する。このしかけがどのような場を生むのかを調査し、居場所創出のモデル化をはかる。

### 3) オクトーバーフェストの有機的活用

2022年度の「オクトーバーフェスト」は、10月半ばに開催されることにすでに決定している。これまでの関係構築を基盤にして、この運営に本部企画メンバーとして携わることを通して、地域資源のプラットフォーム化をはかる。

## 2. 都市農村交流による居場所づくりのモデル化

### 1) 生活交流の仕組みの構築

カワセミハウスにおける「布川ファーマーズマーケット」の開催を、年４回（山菜、夏野菜、秋野菜＝オクトーバーフェスト、冬野菜＝迎春準備）の形で定型化し、学生が要となって都市農村交流を促進する仕組みを構築する。それとの組み合わせで、「田植え」「夏祭り」「稲刈り」「収穫祭」など集落行事に合わせて、学生および日野市民有志が布川を訪れて生活交流を行う。 ※2022年度は、「越後妻有・大地の芸術祭」開催年であるため、芸術祭と関連する集落活動も活用する。

### 2) 都市農村交流を促進する場やコミュニケーション・ツールの開発

十日町市布川地区をフィールドとして、地区センターや古民家の活用など地域の住民と都市市民の交流を生む場のデザイン、都市と農村の支え合いにつながる都市農村交流カルタのようなコミュニケーション・ツールの開発を行う。

### 3) 農村地区の小中学校との交流プログラム開発

布川地区のある十日町市松之山では、活性化シンボルとして開校された小中一貫校の児童数減少に歯止めがかからず、複式学級化される可能性が生じている。そのため、都市部からの里山（雪里）留学プログラムの展開をはかっている。これに対して、「出張子ども会」のような形で、生活文化学科の学生が子ども支援プログラムを実践し、今後日野市ともつないでいく端緒を作る。

## 3. 空家活用による居場所づくり

大がかりなことではなく、空家に蓄積されているものや庭を「かたづける」という行為から、居場所空間が発生していく「しかけ」を仕込むことによって、居場所の発生プロセスを研究する。ただし、これについては、オーナーとの関係性もあり、無理のない範囲で行う。

### (2) 実践研究のまとめ～持続可能なまちの居場所づくりへのあり方をまとめる

上記1.～3.の活動を実践し、まちの居場所のあり方とその構築プロセス、居場所の可能性と課題等について分析する。また、これらプログラムを通して、居場所に携わる学生等の意識変容調査等を行い、地域愛着や生きがいなどの観点から、地域に居場所があること、そこに大学が介入することの社会的意義と、大学生に対する教育的意義について分析する。4年間（2020年度はほぼ活動停止）にわたる取り組みの成果をまとめ、持続可能なまちの居場所のあり方、大学が介入する意義についての総合知見を提示する。

以上により、研究所設立の当初目的としていた、日野市にとってハブとなる「まちの居場所」（カワセミハウス、および布川地区）を形成する。そして、居場所づくりに関心を持つ市民層の輪を広げ、地域社会に貢献する。

## 取り組み状況について

1. 組織的な取り組みができているか（①～④のいずれかを選択してください）

①できている  ②おおむねできている  ③あまりできていない  ④できていない

※上記を示す事由を記載のこと。「あまりできていない」「できていない」とした場合は、改善点を記載。

研究員同士の意見交換や交流を必要に応じて行っている。

## 2. 研究所メンバーの活動状況について

※分担された役割を含めた活動状況をメンバーごとに記載してください。

須賀 由紀子

日野市カワセミハウス、日野市中央公民館、日野市地域包括支援センター、日野市高齢福祉課

など、市民に寄り添う地域コミュニティづくりの施策を担う日野市の関係各部署との協議や情報交換を行い、各構成員の実践・調査研究が円滑に進むよう、プロジェクト全体の進行統轄を行っている。地域自立のための関係人口づくりの観点から、都市農村交流により広域で地域と地域が支え合う場のモデルづくりとして、新潟県十日町市松之山布川地区と日野市関係者との関係づくり、その中に、学生を参加させて問題意識を高めていくための活動の推進を精力的に進めている。

橘 弘志

担当領域は「まちの居場所」モデル開発のための空間づくり、リノベーション関係の研究  
・2021年度は、生活環境学科の卒業生・学生で構成されるデザインチーム「Studio MK labo」を指導し、カワセミハウスをハブとした居場所創出に関する実践活動を行っている。

井口 眞美

担当領域は、保育・造形活動の推進による「まちの居場所」モデル開発のためのソフトウェアの研究と実践、調査  
・コロナ禍の中で、保育のリソースを居場所づくりにどのように活かせるかについての検討を行っている。2021年度は、大学を起点として、学生やOBの保育者を対象に専門性向上のためのワークショップ等を開催し、リソースの拡充を図っている。

大澤 朋子

担当領域は、児童福祉の観点からの「まちの居場所」モデル開発のためのソフトウェアの研究と実践、調査  
・児童福祉施設が実践する「子どもの居場所」事業の調査を行い、これらの知見をもとに、大学の施設や教員・学生を、地域の社会資源として、日野市の子育て支援にどのような貢献ができるか検討を行っている。

## 成果について

### 1. 波及効果が見込まれる成果が得られているか

※上記の状況を示す事由を記載のこと。(波及効果については、主に事業終了後の発展を問うものであるため、設置申請書で示した波及効果および教育又は社会に還元するために得られる知見に対し、現在の見込みを記載してください。申請時との差異がある場合も、その旨記載してください。)

主に「日野市カワセミハウス」を拠点としながら、コロナ禍の中でもできることを模索し、当初目的としていた「居場所づくりのモデル化」と「地域のハブとなる居場所づくり」は進めることができしており、研究所としての「まちの居場所づくり」の活動は、1年遅れで、ある程度実践できた。カワセミハウスで実施したオクトーバーフェストや布川地区との交流活動については、2021（令和3）年度第4回日野市議会定例会において、日野市長から、主要な行政事項として報告され、地域の活性化をはかる地域交流のしかけとして、今後の継続発展への期待が言及されるなどの波及効果が認められている。

また、都市農村交流による居場所づくりの拠点としている十日町市布川地区に関しては、本学の活動に基づく関係人口の創出・拡大の実績が認められて、当地「布川の棚田群」は農林水産省「つなぐ棚田遺産」の一つに認定されている（2022年2月）。

## 2. 雑誌、学会発表、図書など

- ・『女子大生が全部まわった 地区センター図鑑』（2020.3）
- ・『児童の放課後支援活動に参加した学生の育ち―日野市M地区での「子供の居場所を作る会」の活動から―』井口眞美、日本幼児教育学会誌第25号、2020年6月
- ・日本建築学会編『まちの居場所 ささえる／まもる／そだてる／つなぐ』鹿島出版会、2019